

2017年度 シラバス情報表示画面

科目コード : 40114 単位数 : 4

科目名	経済と歴史	科目責任者	北 政巳
課題と試験担当教員			
履修方法	S スクーリング学習		
ナンバリング	CECON151		

■ 科目概要

経済学では大事な3つの柱がある。それは経済理論と経済政策と経済史である。それ故に、どこの大学でも経済学部の主要科目に、経済史（大学によっては社会科学概論とか「経済と生活」のような表現もある）が入っている。科目の目的は、明治以来先進諸国に追いつくために、我が国の経済発展をいかに進めるかにあった。それゆえに先進国の経済発展を参考に世界の経済発展を理解し、近年の日本経済の成長を背景に、いかに世界経済に貢献していくかを学ぶところにある。教科書は1・2章が経済史理論と科目概要、3章以降6章までがヨーロッパを中心とした古代、中世、近世、近代、第7章が産業革命を中心に国際比較視点を強調したい。第8章から10章までが現代資本主義の理解の概要である。各章と演習課題は結びつけて作成されている。それ故にスクーリング学習、テキスト学習のいずれにしても、まず演習課題を見て、どのような課題が問題視されているかの理解は大事である。それが試験問題にも連動して作成される。

■ 到達目標

本科目の受講を通じて、現在の社会経済が人類史の中でどのような段階を経て形成されてきたかを理解する。さらに日本の経済発展が、世界の他の国と比べてどのように異なる歴史過程を経てきたかを理解する。さらに近代社会以降、様々な国が他国との経済競争において、様々な政策をとってきたが、その学習を通じて、今日の日本経済のとるべき経済政策を自分で考える能力を身につけることになる。さらに日本を基準に、中国をはじめとする他の国々との経済発展の比較を考える力をつけることにある。

■ 科目の計画・内容

学習範囲 該当する章など	学習内容
1回目 第1章1-6	経済史学の生誕をドイツ歴史学派の旧と新の学派の違いから論じる。その背景には、英国のスコットランドの経済学者アダム・スミスの発展段階の意識から始まる。資本主義が軌道に乗ると英国は自由資本主義を謳歌するが、マルクスの批判する経済格差が激化する。20世紀にいたる経済史理論を紹介。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組み合わせること。
第2章1-5	1章の継続として、社会経済史現象を理解する学問として、経済史研究の拡大領域で接する11の学問分野を紹介する。つまり時代と地域の差も含めて、過去の経済活動を理解する方法を多くの経済史家が提起してきた。そのうちの5分野を説明し、相互に如何に関連づけられるかを紹介する。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組み合わせること。
第2章6-11	特に近現代に発展してきた後半の6-11の学問分野を紹介する。この第2章は私たちテキスト執筆者が独自の立場で作ったものである。産業考古学は英国で、経済人類学はアメリカで発展した学問である。ディアスポラ論はもっとも新しい経済史の分野である。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組み合わせること。
第7章1-3	産業革命の原点であり、「古典的産業革命」と呼ばれるイギリス産業革命を綿・鉄工業という中軸産業を中心に考察する。そして、比較史の視点から主要国（仏、独、米、露、日）における産業革命をイギリスの派生形態として把握・分析する。また、労働者の貧困化といった産業革命の負の側面にも光を当てる。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組み合わせること。
第8章1-5	イギリスで始まった産業革命は、やがてそのイギリスを中心とした生産と消費の世界市場を形成するが、他方でそのイギリスに追随する仏、独、米、露、日の資本主義の発展を促すことになる。ここではこうした世界資本主義のメカニズムを考察する。これは帝国主義の拡大とも密接な関係にあることを論じる。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組み合わせること。

学習範囲 該当する章など	学習内容
第3章1-3	人類史の初期における人間が類社会を構成した時、まずは血縁に始まり次いで地縁、更に金縁と移行する。村落の形成が権力抗争を経て古代国家が形成される。古代における東洋と西洋では環境と人間の類意識の差から。様々な国家形態をとる。それを吟味して現在社会の歴史風土を考察する。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第4章1-5	ゲルマン民族の大移動がヨーロッパ封建社会の元基形態を形成した。それは荘園と呼ばれた社会経済単位をもとに、封建社会経済を形成した。さらに封建領主を中心に都市が形成された。生産力の向上、地代が現物のうから金納に移行し、国境をこえた通商経済圏も形成され、安定的な中世ヨーロッパの繁栄をみた。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第5章1-4	重商主義の旧と新の比較を述べる。そのうえで、ヨーロッパ各国で重商主義に政策上の比較を述べる。さらに封建主義の中にあって次代の産業革命の時代につなげる「初期資本主義に時代」に注目する。その初期資本主義の上で、英・仏・独・米の4国で近代社会を拓く市民革命が生じることになる。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第6章1	英国では「産業革命」と呼ばれる社会経済現象が生じるが、イギリスで生じた産業革命はヨーロッパ各地に工業化の影響を与えていく。一方における資本主義企業家と他方における無産プロレタリアートを生み出す。増加する労働者人口の維持のために農業革命が生じ、さらに資本家と労働者が階級化される。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第6章2	農業革命には2つの局面がある。ひとつは農土地制度の変革、もうひとつは農技術の革新・向上による生産量の拡大である。農業革命の進展が、資本主義企業家の誕生を見て、国家経済の枠を超えて活動する産業資本家が活動する。特に基幹産業の綿工業と鉄工業の興隆につながっていくプロセスを見る。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第9章1-2	20世紀は前世紀と比べて、政治的にも経済的にも遙かに混乱した時代であった。ここでは第1次世界大戦勃発から第2次世界大戦までのいわゆる「戦間期」の世界経済の動向と主要各国の経済について考察する。まずは、第1次世界大戦を境とした世界経済の変化と世界大恐慌について取り上げ、論じる。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第9章3-4	前回からの続きで、世界大恐慌による大不況を克服するために主要各国（米、独、英、仏、日）が実施した諸政策について考察する。また、ロシア革命を経て誕生した社会主義国ソ連の経済体制についても一瞥する。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第10章1-3	21世紀の現在に直接繋がる1945年（第2次世界大戦終結）以降の世界経済について学習する。その際、アメリカ主導の世界経済体制の構築、冷戦により東西両陣営に分かれた主要国の経済再建、さらには、「資本主義の黄金時代」と呼ばれる1950～1973年の時期の世界経済を概観する。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第10章4-6	前回からの続きで、1970年代以降の世界経済が変質していく時代について考察する。この変質期は、ベトナム戦争、ブレトンウッズ体制の崩壊・変動相場制への移行、石油危機を通じて、アメリカの覇権が衰退していく時代である。さらにアジア、中南米、アフリカといった発展途上国についても言及する。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第1章1-6	経済史学の生誕をドイツ歴史学派の旧と新の学派の違いから論じる。その背景には、英国のスコットランドの経済学者アダム・スミスの発展段階の意識から始まる。資本主義が軌道に乗ると英国は自由資本主義を謳歌するが、マルクスの批判する経済格差が激化する。20世紀にいたる経済史理論を紹介する。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第2章1-3	1章の継続として、社会経済史現象を理解する学問として、経済史研究の拡大領域で接する11の学問分野のうち、商業史・経営史・企業者史の3分野を挙げて論じ、経済史の隣接主要領域の理解を習得する。社会経済史は外枠、企業者神学は中心、経営史と商業史は中間領域にあることを認識する。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第2章4-7	続いて近現代に発展してきた後半の4-7の地理学・都市史・人口史・産業考古学学問分野を紹介する。この第2章は私たちテキスト執筆者が独自の立場で作ったものである。特にアメリカで企業者史学が発展したのに対し、産業考古学は産業革命の母国である英国で、発展した学問である。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第2章8-11	さらにつづけて物価史・社会史・生活史・経済人類学・ディアスポラ（離散共同体）の4項目を取り上げる。物価史は古くは古代地中海地方で、すでの物価変動の記録が残存しフランスで発達した学問であり、経済人類学はアメリカで社会学と連携して発展した学問である。ディアスポラ論はもっとも新しい分野。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。
第3章1-3	原始・古代の経済構造を、血縁共同体から村落共同体、さらに金縁関係と展開する社会経済構造の推移を追う。 特に人類の経済生活の最古の社会である東洋のオリエント、インド、中国、日本と、西洋のギリシア・ローマ、ゲルマンの対比を学ぶことが大事である。テキストの課題部分を2時間程度読み取り組むこと。

学習範囲 該当する章など	学習内容
第4章1-5	ゲルマン民族の村落組織がヨーロッパ内大移動の中で各地に定着し、荘園を形成する荘園経済の発達、より豊かな生活のために都市が誕生する。 さらに経済活動の進展が国境をこえた遠隔地貿易を生み、中世ヨーロッパを代表する3大商業圏が形成された。
第5章1-4	近代本主義の萌芽期を考察する。封建社会国家の枠を超えて、国際的な商業取引を開始する。特に東用との胡椒や香料の取引は莫大な富をもたらした。イタリアではルネッサンスの華が咲いた。東洋貿易での銀決済のため、各地で金銀の採掘がおこなわれ、さらに大西洋を越えて中南米にも進出する。
第6章1、2	英国では「産業革命」と呼ばれる社会経済現象が生じるが、イギリスで生じた産業革命はヨーロッパ各地に工業化の影響を与えていく。一方における資本主義企業家と他方における無産プロレタリアートを生み出す。増加する労働者人口の維持のために農業革命が生じ、さらに資本家と労働者が階級化される。
第7章1-3	「古典的産業革命」と呼ばれるイギリス産業革命についてしっかり理解した上で、主要各国（仏、独、米、露、日）の産業革命と比較・検討してみてください。また、産業革命の結果、何がもたらされたか、どのような変化が生じたかについて理解を深めてください。
第8章1-5	18世紀後半に始まるイギリス産業革命は、綿工業・鉄工業・銀行金融業を媒介にしながら、やがてイギリスを中心とした世界資本主義体制として確立される。そしてそれは世界分割を目指した主要国の領土拡張という帝国主義的政策と密接に結びついていた。こうした点についてしっかり理解を深めてください。
第9章1-2	第1次世界大戦を境とした世界経済の変化を「国際金本位制の再建」、「保護主義と経済ナショナリズムの台頭」、「農業問題」、「アメリカの台頭とイギリスの停滞」などを頼りに考察してください。また、世界大恐慌を発端に1930年代の世界経済がブロック化の方向へ進んで行く過程をしっかり理解してください。
第9章3-4	1930年代、主要各国は大不況克服のために様々な政策を実施していく。その内容や成功の度合いは各国ごとに異なっていたが、国家がより介入主義的役割を果たしたという点では共通していた。特に、アメリカとドイツの事例に注意を払いながら1930年代の各国経済について理解を深めてください。
第10章1-2	第2次世界大戦後の世界経済が、アメリカ主導のIMFとGATTの2つを制度的な支柱として成立したことを理解してください。とくに、世界経済の安定的な成長を支えた世界銀行（国際通貨基金）に役割を理解する。世界が東西（資本主義と社会主義）の対立時代の経済発展に関心を向ける。
第10章3-4	1970年代以降、世界経済はその構造を大きく変化させた。次第に西側諸国（資本主義）が東側諸国（社会・共産主義）を圧倒していく。発展途上国も東西対立に巻き込まれたが、次第に資本主義の優位となり、ヨーロッパはEC共同体を形成する。社会主義諸国は資本主義経済を受け入れ冷戦時代は終わる。
第10章5-6	冷戦終了後、スーパーパワーの米ソは融和したが、地域・民族的な対立は頻発して世界経済はグローバル化の中で各国が経済競争を展開する。特に1990年代以降のロシア連邦、中国の市場経済論理の受け入れ、ベトナムの変化、ASEANの成立、中南米、アフリカ経済も世界経済に巻き込まれ現在の世界経済を形成する。その流れを汲み取ることが勉強の目的である。

■ ディスカッション・ペアワーク

ディスカッション・ペアワークを行う場合があります。

■ 学習方法・評価

種別	評価基準
試験	スクーリング試験、講義の内容の理解・学習度 テキスト科目試験、テキストの理解・知識量の度合い
レポート	・経済史学の学問体系を正しく認識できること。 ・経済史学の領域・関連分野を理解すること。

■ 評価方法

- スクーリング試験：70%
- レポート：30%

■ 教科書

書名：一般経済史
著者名：北・西田

出版社名：創大通信教育部
出版年：2009.4
版：初版
刷：
ISBN：978-4-86302-028-3

■ 参考書

学習指導書の各章の末尾に掲載されている。またスクーリング中に別途、紹介する。

■ 履修上のアドバイス

単なる歴史の授業とは異なり年代で生じた現象ではなく、経済史ではあくまでも人間のいとなむ経済生活の形態と法則の上に展開される経済活動を把握することになる。それ故に社会経済構造の規定部を何が動かしていくかが理解の中心である。それゆえに授業、レポート前にテキストを読むのは必要

■ 自習時間

スクーリング受講の前に、DVD学習の5コマは必然的に大事です。特に経済史学の考え方や推移等について述べており、経済史授業の「変わらぬもの」と「変わるもの」との識別が大事である。演習課題にそってレポート学習をすると、それに関連してレポート課題、またテスト課題に向くような形で出題されている。レポート作成に最低15時間の学習をしてください。

■ 担当者のプロフィール

北正巳：本学経済学部所属。1971年開学時より創価大学経済学部勤務し大阪大学経済学博士。専門は英国・スコットランド経済史。学部・短大では比較経済史、ヨーロッパ経済論イギリス研究、国際経営史を担当。

西田哲史：本学経済学部所属。本学15期生で創価大学・大学院修士・博士課程修了後ドイツ留学、ドイツ・ビーレフェルト大学Ph D. 専門はドイツ経済史。学部では現代経済史、西洋経済史を担当